すなやま支援員だより

VOL.75

令和 6年 7月 発行
発行者：砂山地域集落支援員 阿部久美子
拠点施設：ぎょぎょかい めでたや
住所：塩谷1181 電話・告知端末：62-7273

短冊に願いを込めて

6月25日に平林小学校で超ロング昼休みが行われました。当日はめでたやの開催日で子供たちと作業することはできなかったのですが、後日、まちづくり協議会の会議があり、玄関先に飾られた笹に下げてある短冊を見てみると、「家族がみんな笑顔で幸せでありますように」「世界から戦争がなくなりますように」と書いてあり、博愛的で清らかだなと思う反面、小さいうちから、こんなことを考えているのかな？私達の子供のころと違うな、お家で親御さん達が話しているからなのかなと、衝撃を受けました。

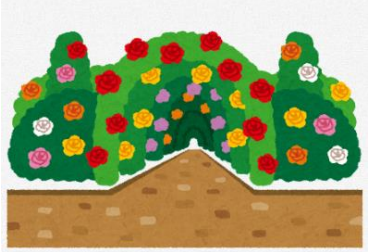
七夕は、本来旧暦の7月7日(現在の8月上旬から下旬頃)に行われ、諸説ありますが、中国と日本の文化が合わさっていて、七夕は1年に1度だけ、織姫と彦星が天の川で会える日とされています。

織物の上手だった織姫にあやかって、「物事が上達しますように」とお願いごとをしたのが始まりだと言われて、短冊の色や、笹につける飾りにも意味があるそうです。

五色の短冊には、それぞれ意味があり、青(緑)は人間力を高める、赤はご先祖様や親への感謝、黄色は人を信じ思いやる気持ち、白は義務や決まりを守る、黒(紫)は学業向上の願いを書くと、それぞれの願いが叶いやすくなるといわれているそうです。

また輪つなぎは天の川を、吹き流しは織姫が織物に使っていた糸を、網飾りは豊作・大漁・食べるものに困らないように、ちょうちんは周りを明るく照らすことから魔除けの意味や神様が短冊に書かれた願い事を読みやすくするためといった意味も込められています。

物事をするときに、いわれや意味を知ってからやると、事柄への姿勢が変わってくるように思います。そうした中で現代にそぐわない物、大切に守り伝えなければならない物の選別が大切なのかもしれませんね。



福田の茶の間

先日、福田の茶の間にお邪魔してきました。この日はお天気も良く、福田の茶の間のお世話係をしている田中さんのお庭のバラが見ごろを迎え、集落のみなさんとガーデンパーティー。神殿のような白亜の柱のアーチを抜けると、青々とした芝生が広がり、赤やピンクのバラが競うように咲き、海外のお庭でちょっとしたお茶会をしているような気分に。

このお庭は、田中さんのご主人が一人で、一つひとつ手作りで、設計図もなく写真などを参考にして、作り上げたそうです。

身近にあるいいところ探しをして、住んでいる地域を見直してみるいい機会になりました。

⚡イナズマは稲の妻⚡

稲妻/いなづま

稲妻とは、茎中の放電によってひらめく火花。稲妻は、「稲の夫(つま)」の意味から生まれた語。古代、稲の結実時期に雷が多いことから、雷光が稲を実らせるという信仰があった。そのため稲妻は「稲光(いなびかり)」「稲(いな)魂(だま)」「稲交接(いなつるび)」とも呼ばれ、頭に「稲」がつけられる。雷は神鳴りが語源、神がならすと考えられていた。

語源由来辞典より抜粋～

大雨で気が滅入る毎日ですが、他愛もない話から「雷が多いときは、お米が美味しくできる、だから「稲光」とか「稲妻」とか気象現象なのに“稲”という漢字を使うんだよ」という話を聞き、農家の人ならその理由がわかるのかも！と思い、色々な人に話を聞いてみたのですが、納得できる答えはなく、「稲雷」でもよかったのに、なんで妻なの？という新たな疑問まで生まれて、なんだかモヤモヤ。

調べてみると、植物の生長に必要な要素の一つの「チッ素」は空気中の成分の中で80%を占めているそう。しかし植物は空気中のチッ素を直接取り込むことができない。そこで活躍するのが雷の放電。放電によって空気中のチッ素と酸素が結び付き、雨に溶けて地上に降り注ぐ。雨が土壌にしみ込むと、稲は根から、植物の三大栄養素（チッ素N・リン酸P・カリウムK）の一つであるチッ素を取り込むことができ、ぐんと成長して秋にはたくさんの実りにつながるとのこと。

昔と違い、現在ではゲリラ豪雨などもあり、気象の変化が大きいため「雷が多い年は豊作になる」とは言い切れませんが、おばあちゃんの知恵袋的な、昔から言い伝えられた事柄には、根拠があることも多く、感心することばかりです。